

天文同好會

本部より

こゝに本會創立滿十週年の秋を迎え、應賀に堪えない。

過去十年間の會員諸氏の熱心なる御援助を感謝すると共に、次ぎの十年間の發展計畫のため、來る十月十八、十九兩日、本會發祥の地なる、京都の、花山天文臺に記念總會を開く——其のプログラムは別記の通りであるが其れの準備として、去る八月二十五日、京都で本會幹部會が開かれた。そして、下記の人々に、向ふ二ヶ年間の評議員を御依頼した。

九月一日から滿二ヶ年間で下記の方々に本會の評議員を御依頼

新城 新藏(京都)	村山 辨次(尼ヶ崎)	上條 清人(松本)
見元 了(臺北)	能田 忠亮(京都)	改發 香塢(神戸)
三澤 勝衛(諏訪)	西岡 永太郎(奉天)	百濟 教猷(大阪)
森本 慶三(津山)	宮島 善一郎(上田)	水口 民次郎(上海)
松山 基範(京都)	吉田 卯一郎(神戸)	荒川 忠一(濱松)
小槇 孝二郎(金屋)	石橋 榮連(京都)	吉田 源治郎(今津)
田中 朝夫(高松)	飯 義 壽(京都)	原 澄 治(倉敷)
大坪 雄太郎(鳥取)	垂井 増太郎(京都)	水野 千里(岡山)
中村 饒(廣島)	白井 頼吉(京都)	宮原 節(岡山)
廣津 藤吉(下關)	多田 文太(京都)	米田 勝彦(札幌)
惠藤 一郎(山口)	吉岡 哲夫(大阪)	佐藤 興三(小樽)
古賀 和吉(大牟田)	内海 孝夫(福岡)	上島 直之(大阪)
川崎 俊一(水澤)	山本 齊(熊本)	宮森 作造(大阪)
早乙女 清房(東京)	村上 春太郎(鹿児島)	城 憲 三(大阪)
五藤 齊三(東京)	大山 督(京城)	神田 茂(東京)
内海 茂(大阪)	奥村 幸二郎(大阪)	島本 徳三郎(京都)

此等の新評議員たちと、一夕懇談し會の將來に關する御意見を伺ふため去る九月十三日、大阪で評議員が開かれた來會者十七名、何れも熱心に會のために考究せられた。詳細は十月の總會で御報告申します。

會 計 十 年 記

私が會計を御引受けしてから約二年になるので、會計の事は一通りも二通りも解つた。それで十周年記念に當つて、昔の事今の事を少々書き並べて見る。

會計をやりながら色々の不思議を發見した。有りそうで無いのが金である事も解つたが、無い様で何とかなるのも金であると思つた。金儲けに會を作つて居るのでは無いから、利益を擧げる計算は立てゝ居ないが、それにしても喰ひ込むのは眞平である。併しとかく喰ひ込みたがる。

海老會計の時代は、創立後の發展時代で、會費も安かつたが、それでも會費の集りは良くなかつた。會費切とか集金とかの文字が続いた。

前金で會費を頂く様になつてから一時少しは樂になつたが、妙なもので直ぐ詰つた。年の始に金が澤山手に入ると、幹部の氣が大きくなつて、雑誌の頁數を増す。出版をやる。事務所を街頭に出して一大發展をやる。そして年末に金が足らなくなると印刷屋の支拂を延して補つて居た。この間に掛賃の固定したのも大分出來た様である。そして之れではいけないと、或時は會員から寄附金を頂いて大に助かたが、會計の根本が立つて居なかつたから此の後又々不加意な状態となつた。私がやる様になつてから會計の基礎は確立した。と言ふと大きい事を言ふ様であるが、私は前に或る大銀行の計算係をやつて居つたから會計事務には自信がある。不良資産や債權はどしどし處置をつけ、債務の方も印刷所から多額掛借になつて居るのを大部分返済して將來の見込を付けた。そして有り難い事には最近印刷費が大部安くなつて總べてが益々樂になつて來たので會費値下の案まで出るに到つた私の近い將來の希望としては、會費を引下けて、原稿料や、編輯料を計上したいと思ふ。現在では會費は全部印刷所に廻り、^{「天界」}や^{「星」}は、寄稿者編輯者の奉仕によつて出来るのであるから。(池田記す)

本會創立以來の會員

山 本 一 清 (京都) 冷 泉 爲 系 (京都) 前 田 徳 次 郎 (大阪)

新城 新藏(京都)	堀田 一夫(臺灣)	本山 彦一(大阪)
川崎 俊一(岩手)	白井 頼吉(京都)	大村 孝逸(山口)
木村 勘治郎(京都)	垂井 増太郎(京都)	水野 千里(岡山)
中村 要(京都)	棚橋 陽吉(福岡)	熊野 徳一(廣島)
竹田 半(宮津)	吉田 源治郎(兵庫)	森 義清(上海)
池田 徹郎(岩手)	中 伊兵衛(伏見)	安盛 光藏(大連)
藤井 善助(京都)	百濟 教猷(大阪)	山田 榮三郎(兵庫)
木田 庄之助(西ノ宮)	石井 峰男(福山)	以上26氏

同志社支部通信

幹事 飯 義 壽

◆五月十六日(金) の講演會は神學館の講堂で行ひました。山本先生の「超海王星の發見に伴ふ新問題」といふので約百名の來會者は何れも興味と熱心と満足とをもつて博士から此劃期的な事件についての新知識を分け與へられました。新學期最初の催なので新入會者も数名あり、同志社中學圖書室や同志社大學圖書館で今度から「天界」を備へ着けてくれる事になつたのは遅播き乍ら嬉しく思つてゐます。

◆同十八日(日) には午後から新會員を案内する意味で、花山天文臺の見學を行ひました。一行廿二名吾々はいつも清水寺經由で行くので今度も遅刻した女學生數名が道を迷つたのは氣毒でした。例の如く中村要氏の懇切な説明と案内を願ひ、時計室では新着のシンクロノーム時計を見せて頂きました。

◆同二十日(火) 午後二時から同志社女子専門學校の第一講義室で女學生の爲めに中村要氏の「スマトラに於ける皆既日蝕の觀測」といふ幻燈と寫真入りのとても面白い講演をして頂きました。射ち落した猿がハラボデだつた所や、南洋の抱き枕の説明振りには、流石の同志社のモガ連も眼をパチクリさせてゐた様でした。

◆之等の會の前後にはいつもの如く觀測會を計畫してゐましたが曇が多く良い成績は得られませんでした。尙五月廿六日(月)には同志社公會堂で山

本先生の「シワスマン彗星と流星群」といふ講演會をする様、京都 Y.M.C.A. 同好會と連名で揭示を出してゐたのですが都合で延期になり残念でした。

倉敷天文臺第一回講習會報告

倉敷天文台主事 水 野 千 里

は し が き

豫て倉敷天文臺主催で、天文學講習會を開催したい考へであつたが、その機會がなかつた。本年は臺長山本一清博士が、御多忙に拘らず、御出で下さることになり、原名譽臺長の特別の御心添へによつて、八月十七日から二十日迄四日間大原農業研究所講堂で盛に行はれた。

1. 講 習 申 込 者

講習申込者は臺南州一名、大分縣一名、山口縣一名、廣島縣九名、鳥取縣四名、香川縣一名、和歌山縣一名及び岡山縣四十五名、合計六十三名あつたが、實際出席されたのは四十七名であつた。

2. 第一日（八月十七日）

午前八時から、午前九時迄受付、會費（通常會員金貳圓、天文同好會員壹圓五拾錢、學生壹圓）を領收し、午前九時原名譽臺長開會の辭を述べ、それから山本博士壇上に登り、「實際天文學」の題下に講演を開始され、正午過ぎ迄、熱心に、一、宇宙の概觀から説き起し、地球の形ちと大きさ、地球の構造、大氣、自轉、公轉、月の運動、太陽系、内外の運動、距離、恒星界分布と運動、大宇宙小宇宙について、細説し、進んで 二、天球と諸運行に移り、イ、地平座標、天球、方面。ロ、赤道座標、日週運動、時間。ハ、黃道座標、太陽の運動、黃道と十二宮、月及び遊星の運行を説き來り、説き去り、聽講者に多大の感動を與へ、第一日を終つた。

3. 第二日（八月十八日）

午前九時開講 山本博士は前日に續き、二、星座と恒星について一言し、ホ、實用天球學、時間、位置、季節、曆について述べ、三、天體の觀察に入り、甲、恒星界 イ、光度、量數、距離と分布、固有運動、色、進化。ロ

二重星，肉眼と望遠鏡，數，色，連星，多重星．ハ，變光星，種類，代表的，觀測法．ニ，星群と星團，肉眼星團，球狀星團，星群，運動．ホ，星雲，種類，恒星との關係，距離と運動とに就いて，蘊蓄を傾け，恒星界の近況を語り，その盡くところを知らず，天文學界に於ける，最近の事情を明にして降壇．

午後一時から，天文臺參考館で，特種の會合が催され，和歌山縣小槇孝二郎君が，流星に就いて述べられ，多大の感興を惹き，山本博士を中心に天界に關する諸問題に亘り，懇談に日の傾くを知らず，玉島の荒木健兒君廣島の大橋登潮君も，大に談ぜられた．

午後六時から，二三會館で，山本博士慰勞會が催され，博士を主賓とし原名譽臺長，佐々木元一，中藤益之介の三氏に余を加へて五名，シンミリと話した．

4. 第三日（十九日八月）

午前九時開會．山本博士前日に續いで，乙，太陽系について，イ，太陽，月．ハ，遊星，衛星．ニ，彗星と流星．ホ，黃道光の題下に，太陽系の近況を説き，丙，天文器械．丁，時計，望遠鏡を略述し，三日間を以て，その講演を終了された．時に正午を過ぐること十餘分であつた．

午後一時から，午後三時迄山本博士慰勞茶話會が，參考館で催され，講習會員約三十名出席，懇談の内に，天文に關する諸種の疑問は解かれ，相互に親睦を深かめた．

倉敷天文臺には臺長が四名ある．世界廣しと雖ども，恐らく天下一品であらう．「眞正の臺長」はいふ迄もなく，京大教授理學博士山本一清先生である．「名譽臺長」は本天文臺寄附者，倉敷市の素封家原澄治氏である．その外の二名は誰であらう．一は「留守臺長」小川龍五郎氏．同氏は大原農業研究所に勤め，傍ら天文臺の日々の世話をして居られるところの篤志家である．今一人は……山本臺長は時々出張されるのであるから，世の者は余を臺長と思つて居るものもあるので，「通俗臺長」よ．これで臺長四名を有する奇拔の天文臺である．

山本博士は花山天文臺をよそにして、無理に出張されたので、午後四時二十分倉敷驛發で歸洛された。酷暑の折柄連日の勞を感謝するものである。

5. 第四日（八月二十日）

最終日の本日は水野主事、¹大熊星座と小熊星座²の題下に 1. 星座と星の名、2. 大熊星座＝神話、北斗七星、時計としての北斗、案内星としての北斗、北斗星群、3. 小熊星座＝緯度を知る方法（北極星法と南日法）北極星を見出す方法、北極星、北極星の異動を三時間餘に亘つて講述し終つて、終了式に移り、水野主事講習會に關する諸報告をなし、原名譽臺長一場の挨拶を述べ、年々八月中に、天文學講習會を開會する旨を宣し、天文の講習には倉敷天文臺に來れと。それから四十七名に講習證書を授與して閉會した。講習會員は四日間熱心に受講せられ、³天文に關する基礎的知識を得られたことゝ確信するものである。

6. 天 體 觀 測

八月十六日は第三土曜日に當り、天文臺公開日であつたから、水野主事は去八月二日から十三日迄、吳、廣島、三次、松山、善通寺町及び徳島地方への旅行談を試み、それから天體觀測を行つた。地方の人々や、講習會に出席する爲めに、來倉されて居る方々に、月や土星や金星や、二重星、星團等を觀望させ、た十七日は天候が良かつたので、略ほ前日と同様、十八日は少時間觀測を行ひ、十九日は曇天の爲め觀測不能であつた。中には參考館に宿泊し終夜觀測された熱心家が數名あつた。

む す び

岡山で山本博士を迎へて四回天文學講習會を開いた。第一回實際天文學第二回火星、第三回天文學史、第四回太陽に就いてが、それである。今回はその連続である。これによつて多少、天文學の知識を擴められたことゝ信するものである。以後年々開かれる講習會で、益々その知識を深め普及に努力せんとするものである。

この度の講習會を開くについて、種々斡旋されたところの、佐々木元一、

編輯室より

こゝに天界の編輯も正に滿十年の責務を終つた。

本號はも少し滿十年氣分の記事を澤山載せる筈であつたが、やはり豫算の制限で之れだけに止めた。それでも全頁數38頁になつて了つた。

編輯子も滿十年の仕事を顧みて、嬉しかつたこと、悲しかつたことが交々思ひ浮べられる。何と言つても最も心を惹かれるのは創刊當初の天界第1號や第2號の頃だ。今、會員中に此等の初號を持つてゐられる方は誠に少なからうが、實にうすつぺらな、しかし、實に可愛い、實に親しみ深い初號であつた。たつた十六ページ、それでもキク版で、特別な表紙をつけ、我が國最初の反射鏡であるかの25センチを口繪寫眞に出したり、色刷りの廣告を掲げたりして、まことに、あの時代相應とは言へ、面白い雑誌であつた。其の後、天界は發展し、發達し、進歩し、昂上した。しかし、いつの時代になつても、我が會員の中には第一號や第二號の天界をなつかしみ、あのやうなものを出世させと仰しやる方が少なくない。編輯子も其の御意見を尊重しないではないのだが、しかし、時代は急轉してゐる。あの時代には世に科學雜誌といふものは殆んど無く、かりに一つ二つは有つても、天文事項などを載せるものは皆無と言つて好かつた。従つて、天界も、あのした内容を盛つたので好かつたのである。しかし今や世は昭和の御代だ。何十年たつても變らないやうな天文教科書の切り抜き其のまゝの記事など載せて居られる時代では無い。何と言つても今は超海王星時代だ。本號巻頭言にある通り、本會は十年間絶えず時の尖端に立つて新しい事に先鞭をつけ、時代々々を導いて來た。天界だつて其の意味の自覺に燃えてゐる。「必ず民衆を忘れまいぞ！」と同時に「必ず時代に遅れまいぞ！」

本號に、岡山の平松翁の文を頂いたことは光榮である。翁も時代の先覺者として永く世の進歩と共に來られた人士である。そして今でも水野幹事を時々へコマサレル由。我が同好會も「天界」も、翁の如く命永かれ！